



2024 年

6 月 第 1・2・3 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 6 月 2 日 ルカ福音書 7 : 1 8 - 2 3 .

『 来 る べ き 者 』

・ 6 月 9 日 ルカ福音書 7 : 4 4 - 5 0 .

『 罪 は 赦 さ れ る 』

・ 6 月 1 6 日 ルカ福音書 8 : 4 - 8 .

『 肥 沃 土 の 実 り 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

## 《 来るべき者 》

行って、見聞きしたことを（洗礼者の）ヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、（律法の）規定の病（ハンセン氏病）を患っている人は清められ、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。私につまずかない人は幸いである。（ルカ福音書 7：22 - 23）

イエスが語ったこの言葉は、彼の許を訪れた洗礼者ヨハネの弟子たちの質問に対する答えです。彼らは（投獄中の？）師ヨハネに代わって、イエスに、ある事を問い質しに来ていたのです。

来たるべき方は、あなたですか、それとも、ほかの方を待つべきでしょうか。（ルカ福音書 7：19，20）

当時のユダヤ人たちは、誰もが同じ「主を待ち望む」ことで一致しており、その徴としてのメシアの到来があると信じていたのです。さらに、預言書には度々記されていたにもかかわらず、部分的には宙に浮いたままの「その時」の、持ち越されたままの「癒しの風景」に対する期待も相俟ってメシアへの待望が膨らんでいったようです。代表的なものが、イザヤ書の 35 章 5 節以下に“その時”の様子が記されています。

その時、見えない人の目は開けられ、聞こえない人の耳は開かれる。  
その時、歩けない人は鹿のように飛び跳ね、口の利けない人の舌は歓声を上げる。

イエスの周辺にいた人々は、驚きをもって、“その時”の到来を感じとっていたようです。「徴を見せろ、見せたら信じてやる」とイエスに詰め寄った輩には、残念ながら同じものが開示されることはありませんでした。この差を説明する能力を私たちは持ち合わせておりません。また、信じたので救われた人と、救われたのを皮切りに信仰に至った人がいたことも。

## 《 罪は赦される 》

ある日イエスが、おそらくガリラヤのどこかに住むシモンというファリサイ人の家の食事に招かれた時のことです。家人の応対のレベルを見るに、イエスはけっして賓客などではなく、洗足、接吻、塗油といったユダヤの迎賓の儀礼を何一つ享受しません。

しかし、家人に代わってこれを施す外部の人物が姿を現します。人呼んで“罪深い女”です。彼女はなんと自分の涙でイエスの足を濡らし、その髪で（足を）拭い、（足に）口付けをし、最後に持参した香油をイエスの足に注いだのでした。

イエスは、これといったもてなしを自分に対してしなかったシモン（家人）と、外部の女性（罪深い）の態度を比較します。こともてなしに関しては、どちらに愛の形跡が見られるかを悟らせるために。

さらに神キリストを「多く愛した」「女性」の方が、招いただけのファリサイ人のシモンよりも、「より多く赦される者」に相応しいことを悟らせませう。実は、イエスはこの事案が発生する前に、予めこの家の招待者のシモンに対し、二人の債務者の事例の比較を試みていたのです。一人の債権者が、一方には五百デナリを、もう一方には五十デナリを貸し出し、どちらにも返済能力がないことが判明します。債権者がもし、両者の負債を帳消しにした場合、この温情ある「債権者を愛する」のは「より多く（の額の返済を）赦された者」の方（債務者）である、という答えをシモンから事前に引き出していたのです。

この日、無名の女性がイエスに示した一連の愛は赦しの原因であり、また結果でもありました。Ⅰコリント書に示された有名な“愛の定義”は、

愛は忍耐強い。愛は情け深い。妬まない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、怒らず、悪をたくらまない。不正を喜ばず、真理を共に喜ぶ、全てを忍び、全てを信じ、全てを望み、全てに耐える。愛はけっして滅びない。（同書 13 章 1 節以下）

さらに、“人の”ではない“神の愛”は人を行き詰まらせることがありません。

聖書に印刷されたこの譬えの見出しは『種まく人』のたとえ」ですが、実際は種を蒔く人は同一で、蒔かれる“土地”の違いこそが問題となっており、これはけっして“人”の譬えではありません。

イエスのこの話を聞くにあたり、すでに夥しい数の群衆が集まっていたことが報告されています。さて、そもそもガリラヤというところはなかなか耕作地が得られない土地柄だったことでも有名です。したがって種を蒔くための“よい土地”を見出すこと自体が大変でした。群衆の耳には、それが譬え話である以前に、ガリラヤではよく耳にする苦労話としてのイメージが鮮明に浮かび上がります。イエスはこれと宣教における困難とを重ね合わせているようです。

そこがたまたま良い土地であり、種（神の言葉）をまくことが可能である場合に、いきなり百倍もの収穫が得られるというのも、裏を返せば肥えた土地がいかに希少であるかを物語っています。種が道端にこぼれ落ちたり、石地にこぼれ落ちたり、また周辺の茨の中にこぼれ落ちたりするのも理由は同じで、いくら畑の有効利用を心がけても、蒔くべき的（畑）が狭隘すぎるために思いもよらぬ結末をとまなう事例です。

神が宣教の場所（＝相手）として選ぶのも大半はまさにそのような不毛の地（相手、人々）でした。ただ、そんな土地の中にも、種を蒔くべき肥沃な場所が、必ずどこかにあるというのが、この譬えの言わんとしているところです。

例えばその中には、カナンの女がキリストの恩恵を受ける事例のごとく、主人の机からこぼれ落ちるパン屑ならば、子犬でも食べられるという譬えで語られた数少ない事例もあったはずです。これは、その人の信仰がその人を救うと言われたケースでもありました。

逆に、その日イエスの下に集まった夥しい群衆が皆それぞれ、悔い改めて福音を信じる者となれたかどうかは、結果的にはその人次第の問題でした。なぜなら危険と隣り合わせの“道端”、（言葉も）根付かず忍耐に欠ける“石地”、しがらみや、この世の思い煩いに左右される“茨”が相手では、種蒔きも宣教も、困難を極めることになったからです。